

クラシコフの政治と宗教

霜 田 美 樹 雄

ま え が き

一九一七年二月革命により帝政ロシア崩壊後設立された臨時政府も一〇月革命によりソビエト政権に代置された。後者はいうまでもなく世界でさいしょの社会主義理論に立脚した新たな統治形態であり、その理論を後進国ロシアにどのように具体化するか、注目を浴びていたものであった。ここでは建国理念である社会主義理論の具体的実践化に当り、帝政ロシアに既存の宗教およびその組織、つまりギルシャ正教理念とそれにもとづく教会組織を如何に取り扱うかが私にとっては大きな関心事であるし、またその宗教政策の如何は逆に社会主義理論の評価のそれにもつながるのである。ところでソビエト政権による宗教政策といえは何といっても革命直後の国教分離布告發布が焦点となる。この前後のソビエト宗教政策上とくにクラシコフ П. А. Красиков という人物に私はかねがね関心を持っていた。彼の性格、人柄および学問的、実践的能力といったものを知りたいと思っていたが、ソ連邦大百科辞典 Большая Советская Энциклопедия, вт. изд. Том. 23, Москва, 1953 などには僅か四、五〇行しか掲載されていないのでまことに粗略であった。だが、さいきん、クラシコフ生誕百年を記念する論文、著作集が刊行され、入手する機会を

得たので、これをもとに彼のソビエト宗教政策上の位置付けをこころみようと思う。⁽¹⁾

(1) 本論文の伝記的部分は主として次の二論文によつてなる。Л. А. Ворожцова, 100 лет со дня П. А. Красиков. — в журнале, "Наука и Религия", но. 10, октябрь 1970; Л. А. Ворожцова, П. А. Красиков. — в кн., Вопросы Навчного Атеизма, вып. 10, Москва, 1970 など著者集はゆびを出た次でゆびやせ。АН при ЦК КПСС, Л. А. Красиков, избранные атеистические произведения, Москва, 1970

一、クラシコフのプロフィール

1 生い立ち

ピョートル・アナニエヴィチ・クラシコフ Пётр Ананьевич Красиков は一八七〇年一〇月四日シベリア・エニセイ河畔クラスノヤルスク Красноярск の法律家であり進歩的知識人である人の息子として生れた。⁽¹⁾ 彼は父の書庫で進歩的諸文献を読むことができ、これが将来の彼の生活に指針を与えたとする。⁽²⁾ たしかにこの可能性もあったであろう。しかし、おそらく青年時代初期まではふつうの小市民的生活の枠の中で過していたことであろう。一八九一年土地の中学を卒業後、かれは当時の首都に行き、そのベテルブルグ大学の理学部へ入学した。やがて理科に興味を失って法学部へ転部することとなる。一八九二年ベテルブルグのマルクス主義者グループに入り、革命活動に積極的に参加し、自らの生活をあらゆる束縛と搾取から人民を解放する任務に捧げる誓いを行ったと記されている。⁽³⁾

一八九三年大学から除籍される。除籍された理由はいわゆる不穏な活動のゆえである。しかし放校、除籍された者でも、別に大学卒業程度の資格試験の受験は開放されていた。彼はずっと後になってそれをうけて試験に合格し、法学士の称号をうけた。そういえばレーニンもカザン大学を放校され、やむを得ず国家試験により法学士の資格を得た

のだ。⁽⁴⁾

一八九三年革命活動のゆえに逮捕され、ペテルブルグ要塞監獄に拘禁さる。その後シベリアに流刑となり五年滞留する。⁽⁵⁾そこでシュシェンスコエ村に流されているレーニンとはじめて会うことになる。このはじめての出会いの場所はシュシェンスコエ村ではなく、かれの生地クラスノヤルスクである。レーニンは一八九七年三月から八月、および一八九八年九月、ここにおもむき『ロシアにおける資本主義の発達』という著作を進めるためシベリアの蔵書家であり、商人であるユージン「B. Юшин」氏の書庫で研究したときのことであった。その時期レーニンは彼としばしば会い親しいつき合いをし、社会主義の問題について話し合ったという。⁽⁶⁾シベリア流刑といえはいわゆる西欧人間世界から隔絶された極寒の生地獄であり、数々の悲惨な流刑史物語で知られるが、ロシア革命に活躍した政治流刑囚の生活は一般に裕福で自由であったようだ。ツァー政府は政治流刑囚に対しても監視はきびしかった筈だが、おそらくシベリア辺地の警察は簡単に袖の下がきいたのであろう。

そのようなことから彼はレーニンはじめ多くの政治流刑囚と知己になり、交際することを可能にさせた。そしてそれら政治流刑囚からプレハノフ「B. Плеханов」の諸著作や、いくらかのマルクス、エンゲルスの著作ではじめてマルクス主義というものなたるかを知った。かくして、進歩的なシベリアのインテリ代表であったクラシコフは既に早くからチュルヌイシェフスキー「H. T. Чернышевский」ドブロリェーボフ「H. A. Добродюбов」サレン「Л. И. Писарев」など知識人の革命的民主主義と無神論的イデーの影響をうけていたのだとする。⁽⁷⁾反面、彼の叔父がギリシヤ正教の主席司祭であった関係から、教会聖職者たちと多くの知己をもち、かつそれらの諸文献とか諸情況にも通じていたということであるから、青年時代のこの乱読的基礎知識の集積と多角的交際のうちに役立ったものであろう。な

お先にのべた、レーニンの学問研究にさいして、この叔父の主席司祭の馬車を図書館の往復に提供してやったというエピソードも入れておこう。一九〇〇年流刑からプスコフ Псков に帰り、同時にレーニンのイスクラ・グループに入り以後「イスクラ」の代表的活動者の一人となるのである。

2 社会主義闘士への道

すなわち、彼がレーニンと会い、社会主義の問題、とくにクラスノヤルスクの労働者階級のあいだにマルクス主義プロバガンダ組織の形成、階級闘争の諸問題につき討論したときから、レーニンはクラシコフのナロードニキとの和解除し難い闘いについて、またマルクス主義理念宣伝のエネルギーな活動を高く評価していた。この時期クラシコフはナロードニキなどの論敵から「Шушпка (毒舌家)」の綽名をたてまつられたほどだ。⁽¹⁰⁾ そんなことから彼はレーニンの依頼により、イスクラの代表者となり、各地を旅行し、幾度か外国へも行き、ロシア・マルキストの労働解放圏と関係を保持した。また外国ではラファルグ、ツェトキン、リープグネヒトのような世界的にすぐれた革命活動家と知り合い親交をむすんだのである。

ここから彼の活躍がはじまる。すなわち、一九〇二年ロシア社会民主労働党 РСДП(л) 第二回党大会成立のため奔走し、翌年同大会にキエフ委員会代表として参加し、レーニン派に属した。⁽¹¹⁾ 同大会終了後中央執行委員として大会報告をもってロシアに派遣されたが、ドイツで逮捕された。これはリープグネヒトの尽力で釈放された。⁽¹²⁾ 彼は次にボリシェヴィキの代表者として一九〇四年第二インターのアムステルダム会議に参加した。翌一九〇五年、モスクワで非合法に活動し、またペテルブルグ党中央委員、ペテルブルグ・ソビエト執行委員会委員となる。一九〇六年非合法活動のゆえに逮捕される。一九〇八年からペテルブルグに住み、弁護士補として活躍し政治的労働事件の弁護に活躍

した。

しかしなんといっても彼の活躍は大革命後であり、そこで彼はペトログラード・ソビエト中央執行委員および反革命と闘う審査委員会議長のほか、中央官職として、司法人民委員部委員の活動が顕著であった。一九二四年から一九三八年ソ連最高裁判所副長官、また全ロシア・ソビエト中央執行委員 БИКСОソ連邦憲法制定委員などを歴任するものである。⁽¹³⁾

そして一九三九年かれが急逝するまで多くの政治的論文とくに宗教的政策関係の諸論文をあらわして社会主義と宗教の問題につきソ連邦の行く道に一つの指導標を与えたといえる。

- (1) Большая Советская Энциклопедия, вт. изд. Том. 23, Москва, 1970, стр. 221
- (2) Л. А. Ворожкова, П. А. Красиков, — в кн., Вопросы Научного Атеизма, вып. 10, Москва, 1970, стр. 270
- (3) Там же.
- (4) 拙著『政治と宗教——ソ連邦政治の宗教政策——』（昭四七・成文堂）六頁
- (5) Там же., стр. 271
- (6) Л. А. Ворожкова, 100 лет со дня Л. А. Красикова атеист. Ленинской школы, — В журнал “Наука и Религия” (сокращение; журнал), но. 10, октябрь 1970, стр. 43
- (7) АН при ЦК КПСС, П. А. Красиков, избранные атеистические произведения (сокращение : произведения), Москва, 1970, стр. 5
- (8) Там же.
- (9) журнал., стр. 43
- (10) Там же. стр. 44
- (11) Энциклопедия, стр. 221

(12) Воротникова, стр. 271

(13) Там же

二、イスクラ時代

1 国内組織化

前にものべたがイスクラ路線の確立というレーニンの重要な課題の遂行に対してクラシコフは良く協力した。彼は協力層を確立するため各地を旅行しベテルブルグ、モスクワ、ハリコフ、オデッサ、バクーその他の都市をめぐってイスクラ路線の確立に尽力し、それを認めさせる努力をした。それは同時にさし迫った第二回党大会をこの路線に沿って成功させるためでもあった。⁽¹⁾

クラシコフは数回にわたり、レーニンの訓令により非合法文書をロシアに持ちこむため外国に旅した。⁽²⁾彼は困難な諸状況で育った結果、数カ国語を解し、また特に才知にたけ、この役割を果すに適した。彼はふつうバイオリンをもって旅行し、それを演奏することを好んだ。バイオリンのケースと楽譜を持った彼はそこで官憲から疑われることなく、憲兵は彼を演奏に行く音楽家と思ったし、それゆえ党では彼に対して「音楽家」という綽名の一つを奉ったほどである。⁽³⁾彼は背が高く、やせていたので、非合法文書をふつう衣服の下にかくしてはこんだのである。こうしてイスクラ・グループの親しいメンバーとして活躍したクラシコフは同時に第二回党大会準備のための準備委員としても活躍した。⁽⁴⁾

第二回党大会でクラシコフはキエフ地区委員会を代表して出席した。そこで副議長に選ばれ、この重要なポストで

革命的情熱をもって非凡な能力をいかんなく發揮した。同大会における彼の活躍についてレーニンは「一步前進二歩後退」「第二回党大会について」の論文の中で高く評価している。同大会後クラシコフはレーニン理論實現のためロシアに帰国せんと急いだが前述の如くベルリンでドイツ政府に逮捕された。そしてツアー政府に引き渡されそうになった。しかしドイツ労働運動家カール・リープフネヒトの非常な尽力によって釈放されることとなる。リープフネヒトは彼の裁判において、彼の弁護士となり保証人となったからである。⁽⁵⁾

2 海外での活動

クラシコフが釈放されたのでリープフネヒトは彼をシュツガルトへ送り出した。そこで彼は有名な革命家クララ・ツェトキンの隠れ家に身を寄せた。クララは彼を親しく迎え入れ、かつメンシェヴィキに敵対するポリシェヴィキの闘いにおいて彼を熱烈に支援した。すなわち当時クララとクラシコフは親密にむすばれたのであった。彼はのちに、活動生活においてクララの支援をうけたことをなつかしく回想している。ここを足場としてクラシコフはヨーロッパ各都市をめぐり、第二回党大会の報告をし、ポリシェヴィキの立場を強く守った。レーニンの親しい個人的秘書フォティエフ J.K. Forneba はクラシコフの当時の活動について、職業革命家としての彼はメンシェヴィキとの論争をうまく処理し、弱点をさがし、奇知と毒舌を弄して攻撃したと評した。⁽⁷⁾

一九〇四年一二月、レーニンはクラシコフをロシア・ポリシェヴィキ派とフランス社会主義者とのつながりを持たすためパリに派遣した。そこで彼はジャン・ジョレス、シュール・ゲートなどかれらのリーダーたちに会い、武装蜂起など多くの問題においてレーニン路線に立つポリシェヴィキの態度の説明をしかれらの支持を求めたのである。かれはポリシェヴィキの党綱領、党規を忠実に擁護し、かつあらゆる手段で第三回党大会の準備と実施に積極的に関与

した。⁽⁸⁾

また彼とリヤドフ M.H. Яаков はアムステルダムの第二回インターナショナルにおけるポリシェヴィキの代表と
なつて活躍した。一九〇五年秋、クラシコフはペテルブルグに到着。この革命の年にかはただちに党の各都市の委
員会組織形成に没頭した。かれはメンシェヴィキ、エス・エル、カデットなどと辛抱強く闘つた。このほか彼はペテ
ルブルグ市労働者代表ソビエト執行委員会のメンバーとなつた。こんな状況で革命活動に参加したことから、彼は何
回か逮捕された。あるときはペテルブルグ・ソビエト全員と逮捕され何ヵ月か投獄された。⁽⁹⁾

一九〇六年七月、彼はスタソフ E.I. Грабов とともに捕えられペテルブルグから追放さる。やがて彼はペテルブ
ルグに戻り、非合法活動を行つた。

しかし、なんといつても反動期の諸年は革命運動は退潮し、彼自身もその後、ペテルブルグ大学で法学士の国家試
験をうけ、合格し弁護士補の資格を得たのである。⁽¹⁾ かれは弁護士活動することによつて市民生活の中に埋没し、官憲
の目をのがて、時節を待つたといわれるが、労働者の利益擁護の諸事件を扱つたというから、それがほんとに生業
(なりわい)の糧となつたものであるか否かはわからない。その代り、彼等への弁護士活動が彼をして彼らの立場を理
解し、彼らとより緊密な關係に立つことに役立つたのである。

(1) Жыради, стр. 44

(2) Там же.

(3) Там же.

(4) Там же.

- (5) Там же.
- (6) Там же. стр. 45
- (7) Там же.
- (8) Там же.
- (9) Там же.
- (10) Там же.

三、国教分離活動

1 布告審議

一九一七年以後の活躍については、前述の如く二月革命時、彼はペトログラード労農代議員ソビエト組織化をたすけ、一〇月革命のとき反革命とサボタージュと闘う審査委員会を指揮した。また革命後司法人民委員会のメンバーとして新しい民法典、刑法典の作成に積極的に関与した。⁽¹⁾

しかし、一九一八年クラシコフは彼にとって重大な任務であり、彼の活動の評価をきめ得た職務、つまり司法人民委員部において、「国教分離布告」をつくることとその実施を見守る任務がレーニンによって彼に課せられたのである。

まず同年一月、いままで新生ソビエト政権が社会主義社会確立のため行ってきた対宗教諸施策を整理し、理念的統一をはかる目的をもって国教分離布告を發布することとなり、その原案作成には彼とルナチャルスキー A.B. Лунин арский Суховича П.И. Струка Рейсネル M.A. Рейснер をメンバーとする布告案作成委員会が組織されてこ

の任務を遂行し、できた原案にレーニンが目を通して一月二三日発布されたのである。⁽³⁾

このように革命直後宗教諸施策の集大成ともいべき国教分離布告の実際の適用に当って数多くの障害や問題が発生し、それらの指導に当るスタッフが司法人民委員部内で自然発生的に形成されたのである。

そこで五月八日、人民委員会議で司法人民委員部にそのような問題処理を掌管する部局を組織化する決定がなされ、第八局と命名された。この局はクラシコフを長とし、ボンチルブルエヴィチ B. Д. Бонч-Бруевич レイスネル M. A. Peichep モギレフスキー C. J. Moruzekuiñ によって構成された。⁽⁴⁾

この部局の任務はそれゆえ一言にして、国教分離布告の実施を見守る局であった。彼はのちにこれにつき回想して曰く、私は国教分離という困難にして重大な任務をまかされたので、私はこの活動に身を捧げた、⁽⁵⁾と述べている。

2 布告実施の監督

布告の実施に当り、それを効果的になさしめるための指導監督と、啓蒙教育とに区分されよう。

まず、同局は国教分離についての地方当局の活躍を指導し、また布告の効果的实施のための指令、訓令をつくり上げた。⁽⁶⁾つまり、国家と教会、宗教の相関関係の諸問題をマルクス・レーニン原理にもとずいて指導し、布告に宣言された如く、真の信仰の自由を実施することを指向したものである。多くの訓令、指令、解説がしばしばクラシコフによって作成され、出されたし、⁽⁷⁾多くの組織に、布告実施にさいしての具体的實際的条件を考えてやった。

この具体的実施に当り問題となる点は宗教的偏見との闘いである。これはまことに用心深くなされねばならない。一九一九年一月三日クラシコフによって書かれた特別回章は布告の実施にさいし信者の感情を侮辱するようなものよりな行為も回避し、宗教信者に対し、用心深い、節度のある闘いが必須であることを示した。そして、行政的手段に

よる宗教との闘いがかえって宗教的狂信を燃え立たせ、強固にする悪い結果を生むと説いた。⁽⁸⁾

クラシコフと第八局員とは布告実施の具体策についての質疑にいろいろの形式で答えた。たとえば各地を歩き廻り、地方吏員と対談しあやまちを彼らに指摘した。また手紙での質疑にもその都度親切に答えた。たとえばゴルキー地方マラビネジスク村からの質疑に返信して曰く、地方ソビエト当局は市民がもし宗教的信仰の必要性を持つ場合はその自由と平穏を守り、またソビエト共和国法規に違反する人々を好ましい方向にひきよせるべきであるとした。⁽⁹⁾ タンボフスカヤ県で行政的行き過ぎがあったとの報告をうけたときクラシコフは即座に電文して曰く、地方住民の宗教感情に敵対するような形で教会を取り扱ってはならぬとした。かくて多くの手紙、電文、回章の分析はクラシコフが第八局の多方面の活動において宗教問題についてマルクス・レーニン理論の方向を保持するため注意ぶかく働いたことを示している。⁽¹⁰⁾

3 訓令示達

前述の如くクラシコフの指導の下に布告の効果的实施のため「布告実施手続について」という訓令が第八局によって作成され、一九一八年八月二三日示達された。この訓令は一九二九年まで布告実施のための地方組織の実際の指導の指針となった。⁽¹¹⁾

布告の効果的实施の主要な政策の一つは教会の保有している財産の没収にあった。一九一八年から一九二〇年まで、特に当局の指揮の下に教会組織からあらゆる動産不動産が除外され、国有財産となった。ただし信仰の自由を保證するため、信者が礼拝目的のため当該建築物、祭具を利用せんとするときはすべて無償利用契約が可能であった。⁽¹²⁾ これは支配階級と宗教、つまり搾取と支配の道具としての宗教と支配階級の過去の関係を直接、必然的に無害化する

手段の一つとして方向づけられたものであったが、ソビエト政権の敵からは信者と教会を迫害するものとして反撃された。⁽¹³⁾

学校を教会から分離する問題はまた部局活躍の大きな部分を占めていた。第八局は宗教の影響から教育機関を無縁にする布告の意図と課題を実現するため尽力した。それはこの種の質問に与えた解答の中にクラシコフの特に敏感にして慎重な態度を示している。ニジュ・ゴロド県マカリエフスク郡セモフ村の村民がギリシヤ正教信者に世俗学校で神学教育を行うことの許可を請願したのに対し、クラシコフは手紙で回答して曰く、それは布告および訓令違反で許されぬ。もちろん、法令は信仰自由の立場から家庭内での宗教教育は禁じていないが、神の教育が奴隸的宗教道徳を強いるものであり、それは共產主義道徳より劣るものであるがゆえに子供たちに損害をももたらすことを強調した。⁽¹⁴⁾

- (1) журнал, стр. 45
- (2) М. М. Персиц, Отделение церкви от государства и школы от церкви в СССР, Москва, 1958, стр. 104
- (4) 拙著・前掲書・二二六頁
- (4) Ворожцов, стр. 272
- (5) Там же.
- (6) 拙著・前掲書・二四二頁
- (7) Ворожцова, Там же.
- (8) Там же. стр. 273
- (9) Там же.
- (10) Там же.
- (11) Ворожцова, Там же. стр. 274
- (13) 拙著・前掲書・二四三頁

四、無神論宣伝

1 「革命と教会」誌

次に第八局の活躍の大きな部分は無神論宣伝活動に占められ、それは三つの方向、すなわち反宗教宣伝煽動の方法と内容の研究、工場、赤軍、党の集会、大会などにおける宗教問題についての講演および出版活動であった。講演についていえば一九二一年だけで第八局員は二〇三の講演をし一一三四〇〇人の聴衆をもった。⁽¹⁾ また出版については、布告および訓令の解説と無神論宣伝を目的として第八局刊行の雑誌「革命と教会 Революция и Церковь」誌が一九一九年から一九二四年まで出された。⁽²⁾ これはクラシコフが編集したもので、この雑誌は反宗教印刷物のはしりであった。それはソビエト政権の建国当初における無神論活動を忠実に反映したものであり、真の信仰の自由実現の諸方途について諸論文が掲載された。⁽³⁾

だから、雑誌には宗教の起源、本質その他問題の理論的論文、地方組織の活動報告、司法人民委員部第八局による回章、解説などをのせた。

それらにはクラシコフのほかルナチャルスキー A.B. Гунчарский ヤロスラウスキー E.M. Ярославский スクボルツォフリステパノフ И.И. Скворцов-Степанов ヤブミンニコロ H.A. Семашко シュボミンズベルグ И.А. Шницберг Голев M.B. Горов などが寄稿した。⁽⁴⁾ しかし何と云ってもクラシコフのものが一番多く、彼の多くの無神論諸論文はまずこの雑誌に発表された。

レーニンは第八局のこれら活動を高く評価していた。一九二二年人民委員会議小委員会が司法人民委員部第八局の閉鎖を建議したときまたま正教改革派発生により、政権と教会組織間に新たに提起された課題の解決のためと、宗教と教会との闘いのより広汎な組織化の必要性を考えてレーニンはこの提案に断乎として反対したのであった。⁽⁵⁾

2 無神論者組織化

国家から教会を分離するこの部局の主要な指導につきクラシコフは有能な無神論活動の組織者であった。

彼は無神論者陣営の育成と準備に積極的に関与した。彼は一九一九年創設されたスベルドロフ共産主義講習所において、国家から教会の分離に関する講義をうけて活躍した。彼はその他の講演とか報告において主として宗教に対する国家および共産党の政策を説明、解説した。クラシコフの参加なきソビエト政権の宗教問題の重要措置の一つさえもなかったほどである。前の略歴には記載しなかったが、ここで宗教問題関係の彼の閲歴を見ると、大革命後、全ロシア・ソビエト中央執行委員会付属の宗教儀典委員会議長、ロシア共産党中央執行委員会付属無神論宣伝委員会委員、同付属無神論文献出版委員会編集同人、ソ連邦戦闘的無神論者同盟中央幹部会員などを兼任した。⁽⁶⁾そして彼は死の直前まで、教会と国家の諸問題について国家と党のすべての立法行為に直接関与したのである。

クラシコフは一九三二年三二年に刑行された戦闘的無神論者同盟中央幹部会組織の機関誌である「戦闘的無神論 Войнгвующий атеизм」の編集責任者であった。この雑誌はソビエト国家における無神論活動の理論と実際の諸問題についての論文が掲載されたのである。⁽⁷⁾

レーニンの指示に留意して、彼はいろいろな方面の知識をもった非共産主義、非唯物論者をもその雑誌に引き寄せることの必要性について説き、執筆者にその配慮を求めた。雑誌はこのような見地でヤロスラウスカー、ルカチエフ

スキー А.Г. Лукачевский、シーチン М.В. Мигин、フェドセフ П.Н. Федосеев、フランチェフ Г.П. Францев、タンロポゴロース В.Г. Тан-Богораз、ニコルスキー Н.М. Никольский らが理論的論文を書いた。⁽⁸⁾

クラシコフとシェピツベルグはまた一九二一年—一九三〇年まで「無神論者 Атеист」協会の発起人であり、創立者であり指導者であった。それは科学的無神論知識の普及にすぐて大きな役割を果たした。協会ではマルクス、エンゲルスの著作を刊行し、またフランス唯物論哲学諸派、ボルテール、ティドロその他の著作を翻訳出版した。⁽⁹⁾

彼はただに無神論プロパガンダの才能者であるだけでなく、その科学的理論研究にも重要な貢献をした。クラシコフの基本的な無神論の諸労作が一九二三年「教会戦線で На церковном фронте」に論文集の形で刊行された。⁽¹⁰⁾これは長年にわたって、無神論宣伝者のため、無神論に興味をもつ人のため一連の諸論文を紹介したのである。

- (1) Ворожцова, стр. 276
- (2) 拙著・前掲書・二五〇頁
- (3) Ворожцова, Там же.
- (4) Там же.
- (5) Там же. стр. 277
- (6) Там же.
- (7) Там же.
- (8) Там же.
- (9) Там же. стр. 278
- (10) журнал. стр. 46

五、宗教に対する彼の理論

1 宗教の階級の本質

クラシコフが宗教と社会主義理論との関係について活躍した広汎な領域から示された彼の理論的遺産の大きな部分を占めるものは、宗教の階級の本質とその社会的原因の諸問題を分析したことであった。「宗教と共産主義」「農民と宗教」などにおいて彼は階級社会における宗教の社会的原因の深い洞察を行い、数世紀にわたる歴史において宗教および宗教組織の搾取者の本質を暴露した。⁽¹⁾たとえばギリシャ正教会について、彼はそれが何百年のあいだロシア支配階級の忠実な下僕であった……大衆を迫害するあらゆる態度をとる支配階級を神聖化した、とする。

「キリストへの祈禱の秘密」という論文で彼は迫害された大衆の阿片としての宗教の役割を示した。多くの迫害された人々を、それで救うものと期待された呪術的信念、幻想的力というものは働く者に真に有効な方をきめることを妨げ、宗教の社会的原因を撲滅し自己を解放する闘いからそれを外らすのである、とした。⁽²⁾

「信仰の自由と国教分離」では宗教教理が支配階級の利用によって宗教の搾取者の本質を示すこととなることを指摘した。彼はただ歴史的に宗教の社会的原因について研究しただけでなく、社会主義建設時代の農民大衆および働く人々の中における宗教の社会心理的原因について分析した。⁽⁴⁾彼の考えたこれらは今日でもその意義を失っていない。すなわち、彼は一九一九年二月第一回農民コンミュニオン大会で「農民と宗教」という報告において、農業労働者の宗教的基盤が次のような社会的原因に依拠することを示した。それは農業耕作における後進的技術、新知識の欠乏、自然力への従属および文盲は農民の宗教心を発生させ強化させる主要な根基となった。⁽⁵⁾ロシア農民はその労働におい

て、またその生産様式、交換方法において、まったく後進的技術の中で彼らの思考が形成されるのである。そしてそこに、ロシアにおける農民宗教としてのギリシヤ正教の基礎があるのである。農村労働者への宗教の普及は単に農村生活の多くの部分を占めている愚鈍さだけでなく、逆に彼等独特の理論的伶俐さにも発するものである。⁽⁶⁾ 彼らはギリシヤ正教教権主義を媒介することにより神と聖なる世界を自己の生産作業のすべてと結びつけた。⁽⁷⁾ と彼はいう。彼はすべての歴史において支配階級は結果的に自己の階級利益のためこの農民の宗教性を利用し、神の国とか幻想的魔力を借りて奴隷根性を農民に吹込んだと強調した。⁽⁸⁾

2 宗教的偏見への闘い

このような農民大衆の宗教性に対する闘いにつき彼は多くの戦術と細心な注意が必要であること、低い農民の意識が宗教的迷信にとどまっていることを示した。⁽⁹⁾ この宗教性克服について彼は宗教の社会的原因を清算する方向への闘いにもって行くべきとし、人の人による搾取、赤貧と失業の撲滅、新しい社会主義的態度の強化、文化革命諸課題の遂行はすなわち宗教の社会的原因の克服の基礎となる、と。⁽¹⁰⁾

社会主義建設の基本的課題に宗教との闘いの必須性について語った彼は同時に宗教的残存物宗教的偏見との闘いに觀念的要素を軽視し、イデオロギー的教育的諸活動を過少評価する宗教問題の放任主義となづけるものに対して敵対し、勤労大衆に社会主義建設への積極的闘いへの道のため科学的的世界観をつくり上げることであり、どんな機会でも、宗教的残存物への過度の闘いを行うべきでない、⁽¹¹⁾ とした。

このように社会主義の勝利とともに宗教の社会的原因の払拭を試みたにも拘らず、なお一部の勢力、とくに農村人口のあいだに宗教的偏見が残存することは残念なことであるとし、それは宗教と闘うさいの行政機関による行き過ぎ

が信者としての働く者と行政機関とのあいだに無用のフリクションを発生させたし、他方それに便乗した教会の積極的プロバガンダにもよるとした。したがって科学的的世界観確立への闘いと共産主義社会建設の課題実施にとって宗教的偏見との闘いをうまくすることが求められるのである。⁽¹²⁾

ソビエト社会における社会主義的態度の確立にさいし、文化的教育的活動の役割は増大している。彼はそれゆえ無神論的世界観をもった共産主義社会の建設者、進歩的戦士の教育における大きな役割は広汎な規模における文化啓蒙活動を演ずることだとつねに強調した。とくに、農村における活動についていえば、農民に無神論教育を成功させるためには教師、農村インテリが団結することが必要であり、肝要なりとした。⁽¹³⁾

戦闘的無神論者同盟第一回大会（一九二五年）演説でクラシコフは次のようにのべた。反宗教活動はすべての農村の生活状態、生活態度と密接にむすびついてなされるべく、それは農民に自然に対する社会に対して意識的感度の具体的可能性、実現性にもとずき説明さるべきである。⁽¹⁴⁾ 智的専門家としての反宗教運動家は農村にとどまり、農村のすべての活動に合致し、共産主義的課題のリーダーとなり、農民理解力の鮮明を促進するものでなければならぬ、とした。その具体策として、自然科学をテーマとする講演会、読書会、討論会、博覧会、歌、ダンス、体育、図書館の建設などであり、青年達には抽象的判断考察でなく、右の具体的活動を通して、実際的にわれらの側に引き寄せるべきであるとした。芝居、映画、スポーツ、図書館、音楽会などの大衆のための存在が夢幻的、幻想的状況実現の宗教とその宗教組織への必要と興味に代置させるよう努力すべきだとした。⁽¹⁵⁾

クラシコフは信仰の自由につきレーニン理論を国教分離布告、同訓令その他の諸法令に具体化したのだ。彼の理論はいうまでもなく信仰の自由についてブルジョア的であるよりも、マルクス、レーニンの理解でありその重要性につ

いて示した。⁽¹⁶⁾それは後進国ロシアにおいて、人の信仰を保持すること、ないしはどのような信仰も信じないことのないずれもすべて市民の権利として尊重することを高唱するものである。⁽¹⁷⁾すなわち、宗教的礼拝動行の実施および反宗教宣伝の自由の承認、完全な国教分離、したがってソビエト政権下における教会法人格の剥奪、宗教教育の疎隔などである。⁽¹⁸⁾

信仰の自由の真正の実現のためこのような国教分離が必要だとレーニンの立場を敷衍してクラシコフは、ソビエト政権は原理的にあらゆる国家的教会を拒否するさいしょの政府であった、とした。そして右のような範囲内において信者はいぢめられることなく、同時に無神論者とともに共産主義建設に関与している。⁽¹⁹⁾共産主義の世界への闘いに信者との協力の必須性を示した共産主義者は同時に説得、宣伝の手段で科学的無神論知識を信者の間に普及することの必須性についても語ったのである。

それは次のような理由にもとづく。信仰の自由を認めることは信者の信ずる宗教教義を認めることではなく、反対にそれを認めないがゆえに無神論知識の普及に努めるのである。それゆえ宗教理論と共産主義理論を接合しようとするどのような理論も試みも許さないものである。⁽²⁰⁾

一九二〇年代から三〇年代にいわゆる教会革新派と名付ける共産主義的キリスト教徒(?)をクラシコフは積極的に批判した。この改革派はソビエト社会の社会的政治的条件に適應し共産主義の道德的社会的理念に宗教理念や教義をつき合せようと試みたのである。⁽²¹⁾

つまり、初期キリスト教徒の理念、すなわちイエス・キリストはさいしょの共産主義者との理解に吻合して改革派教会のイデオロギーは社会主義理念に接合せんとしたのである。しかし、クラシコフはその論文や演説において、宗

教的世界観と共産主義的世界観、したがってキリスト信者と共産主義者が本質的には両立し難いことを示した。⁽²²⁾

かくて、当時、たまたまソビエト国家側に立った革新派教会を支持して発言した一人の無神論者を批難して、クラシコフは次のようにのべた。共産主義はギリシャ正教と合はないばかりかすべての宗教とも基本的には合はないし、それゆえ労働政府の配慮はすべての奴隷制度の道具としての宗教より、科学的世界観確立の方へ労働者を参加させるに⁽²³⁾あるべきとした。

- (1) Ворожцова, стр. 278
- (2) Пронизведения, стр. 58
- (3) Ворожцова, стр. 279
- (4) Пронизведения, стр. 179
- (5) Там же. стр. 59
- (6) Там же. стр. 63
- (7) Ворожцова, стр. 280
- (8) Там же.
- (9) Там же. стр. 281
- (10) Там же.
- (11) Там же. стр. 282
- (12) Там же. стр. 283
- (13) Там же. стр. 284
- (14) Там же.
- (15) Там же. стр. 285
- (16) Там же. стр. 287

- (17) прозвелегния, стр. 180
- (18) Там же, стр. 281
- (19) Ворожцова, стр. 278
- (20) Там же.
- (21) 拙著・前掲書・二九六頁
- (22) Ворожцова, стр. 278
- (23) Там же.

むすび

クラシコフの業績を一言でいえば国教分離布告の具体的実施諸方策に尽力したことで、その基盤となる科学的無神論の研究に多大の労作をものした。

宗教の本質とその社会的原因、信仰の自由、農民大衆の宗教の社会心理的基盤、キリスト教の起源、共産主義的道徳と宗教的道徳、無神論宣伝の方法形態などで多くの問題説明に新境地を拓いた。

このようなことからクラシコフはしばしば宗教問題でレーニンに建言をし、レーニンは彼を信頼しうる友として、また自己の古い戦友として遇した。

ここで彼の活動の人間の側面を示そう。彼の息子の言によれば、彼はいつも五、六時間睡眠をとったという。それ以外は仕事に専念し、重要な国家活動としての会議、協議会への関与とか、講演、座談会などから解放されたとき彼は無神論的テーマの論文を書き雑誌を編集し、多くの書籍に目を通した。⁽¹⁾そして彼は多方面の知識をもったとき

関心のある人間であり、まことに人道的、博愛的であった、⁽²⁾という。

この偉大な人間も病いには勝てず一九三九年八月三〇日ジェレズノドボスク Железнодорожк のサナトリウムで急逝した。⁽³⁾六九才であった。

ヤロスラウスキーはその年九月一日号「ベズボズニク」で次の如くのべている。ソ連邦労働者はその親しい友人であり、すばらしいポリシェヴィキであり宗教に敵対する強い戦士をここに失った。しかしわれらはあらゆる迫害あらゆる搾取から労働者を解放するすべての方法につきこの人の教えの恩恵に浴している。われらはいつもクラシコフを次のような人として思い出すだろう。それは階級のない、宗教のない新しい社会建設に自己の情熱をそそいだ人としてである。⁽⁴⁾とした。

まことにクラシコフは敵に対して仮借せず共産主義の勝利の任務に献身した。また彼の理論的遺産は科学的無神論活動や大衆の共産主義教育実践におけるその活動性に長く維持される業績をもつ偉大な人間として人々の亀鑑（かがみ）となりとしえに残るであらう。

(1) журнал. стр. 47

(2) Там же.

(3) Там же.

(4) Там же.

(附) クラシコフの主なる著作論文

——宗教、教会、無神論関係——

(1) Советская полтика в религиозном вопросе, 1919

- (2) Советская власть и церковь, 1919
 - (3) Женщина, религия и коммунизм, 1919
 - (4) Религия и коммунизм, 1919
 - (5) Четыре манифеста патриарха Никона, 1919
 - (6) Кому это выгодно? 1919
 - (7) Крестьянство и религия, 1919
 - (8) Пролетарская и буржуазная совесть, 1920
 - (9) Ведают ли, что творят? 1920
 - (10) Выступление П. А. Красикова на X съезде РКП (б) 10 марта 1921 года, 1921
 - (11) Секрет молитвы господиней, 1921
 - (12) Трудовое сектанство, 1922
 - (13) Голод и христианство, 1922
 - (14) Сверхъестественные силы, 1922
 - (15) Свобода совести и отделение церкви от государства, 1922
 - (16) Декрет о церкви и школе, 1922
 - (17) Коммунизм и религия, 1922
 - (18) Письмо П. А. Красикова господину Эдмунду Уолш, 1923
 - (19) Сектанство на перепутьи, 1923
 - (20) Предисловие к первому изданию книги А. Древея «Миф о Христе», 1923
- この編に収録された AN 及び ЦК КПСС、П. А. Красиков、 избранные атеистические произведения, Москва, 1970 年参考とした。